

【ねがいましては】

令和7年2月12日

KYOWA SCHOOL

第416号

「スキーマ」

『スキーマ』とは、例えば、「ボール」と言わると過去の経験から「丸いもの」がイメージされます。事前に知っている知識があることで、次にどのような情報が出てくるかを予測しやすくなり、理解がスムーズになります。重要なポイントや関連性を把握しやすくなり、重要でない部分を無視しやすくなります。わからない単語や構文があっても、全体の流れや文脈から意味を推測しやすくなります。

Web を閲覧し要約してみました。具体例が少なく今一つ理解が難しいといったところでしょうか。

最近出会った著書のなかに、「学力喪失」(今井むつみさん)があります。学びに躊躇ってしまった子どもたちを認知科学の分野で研究されている大学教授です。その著書に「スキーマ」という語彙が大量に現れます。私にとっては「勉強不足もいいかげんにしなさい！」と、叱られてもおかしくないくらいに全く知らない語彙でした。

要約させていただいた内容は、皆、子どもたちの学習に「あったらいいなー」と思わせる内容です。「予測しやすくなる」「理解がスムーズになる」「ポイントが把握しやすくなる」「意味を推測しやすくなる」

ひとが生まれながらにして自然に行われていることなのだろう。今井さんの研究では子どもたちの躊躇の原因が、この「スキーマ」にある割合がかなり高いと言います。

例えば分数の2分の1と3分の1ではどちらが大きいですか?という問い合わせすると結構3分の1と答える子が多いです。スキーマは個人の中につくられた「イメージ」にあたります。目の前に足のない女性が立っています。白い着物を身につけています。両手を胸のあたりまで上げ、怖い顔をしています。ここまで書くと結構どなたも幽霊だとわかるくると思うのですが、これを海外で同じように話したら現地の方々はどう想像されるか・・・。

あらかじめ人は自分の中に前もって固定された「感覚」を身につけています。「梅干し」と聞くと、口の中にあの感覚が芽生えてくると思います。しかし梅干しを一度も食べたことの無い方にとってはその感覚はわかりません。ある方は「梅干しは美味しい味わいのある食べものだ」と言います。また一方では「梅干しは大嫌いだ」という方もいらっしゃるはずです。人によって「スキーマ」は色を変えて存在しています。複数の経験や情報が個々の受け取り方でその方だけの「固有のもの」として心の中にインプットされます。

私はここに着目しました。今井さんは認知科学という専門分野において子どもたちのとった例を研究しています。どのようなスキーマが子どもの中に出来上がっているのか。誤ったスキーマを発見し、それを軌道修正させるのが本来の教育なのではないかと。

私がこだわりたいのはその一步手前のこと『勉強』に対するスキーマです。子どもたちに勉強という2文字を聞いて、または見てもらい、どのような気持ちが現れますか? という問いただす。2分の1より3分の1の方が大きいと学習してしまう子どもたちの学びに対するスタート時点での『気持ち』にこそ大きな問題点が隠されているのではないか。小さい頃から子どもたちは自らの旺盛な好奇心によってスキーマが作られています。その過程で、もし「いやなもの」「きらいなもの」「こわいもの」というイメージがスタートでその子の中に宿ってしまったら・・・。

私が強く感じることは、「勉強」という2文字を子どもたちの目の前に置いたらニコッとして飛びつく子がどれほどいるのかという問いただす。これをぜひ教育の中枢部分にいらっしゃる方々に質問してみたいのです。もちろん文部科学省関係の方々です。プラス今の日本をけん引している、またしてきた経済界の重鎮の方々にです。そしてその大人社会の中に起こりうる現実を、さも「教育」だとして学校の中に取り入れている「現実です」。

代表的な語彙が「受験」です。今でいう「受験」は、高所得をかなり強調するものでないかと、私の中に「スキーマ」が出来上がっています。かつての「受験」は、「人がら」をかなり意識させるものではなかったかと思っています。「東大」「京大」といえば、立派な「人がら」も併せて感じられたように思いますが、その頃にはなかった「偏差値」という語彙にいつのまにか「人がら」は追いやられているような気がいたします。「高収入には高学歴だよ」という暗黙の了解です。口には出さなくても皆がいつのまにか手に入れた「常識」です。その競争に勝つためには早期のテコ入れが必要だ。だから私のところは「小学受験」だと、都内の保護者の方々の中では話題沸騰です。

犠牲者は「子どもたち」です。学習指導要領内に収められた内容は時間と並行し子どもたちに襲い掛かります。もし理解できていなければ、その子は「遅れている」と判断されがちです。そうなっては手遅れだというわけで、子が自らの意思で取り組もうとしたことではない内容が目の前に山盛りです。それを「全部食べなさい」と、命令が飛びます。それが「宿題」です。「食べないと大きくなれないよ」と、これは脅迫罪になります。

子どもたちの「こころ」を健康に戻すことが第一歩ではないでしょうか。

「勉強ってなにやっても楽しいね、先生」。こんな声があたりまえになるよう、大人は考えなければならないと思いません。勉強は競争ではないよ。勉強は比べることではないよ。勉強はやらされることではないよ・・・。

「勉強」という言葉を聞くと「たのしい」というスキーマを定着させることが本来の「教育」では?